

「極性項目の認可条件に関する一考察」*

五十嵐 祐太

1. はじめに

否定の表現というのは人間にしか出来ないことである。そのため、どの言語にも必ず存在し、自然言語を特徴づける基本的な要素の1つである。そして、否定という現象は言語学だけでなく様々な分野で昔から研究され続けてきた。

「否定」というものは決して一様なものではない。なぜならば、「否定」は言語現象を非常に複雑にするものであり、音韻論、統語論、意味論、語用論にまたがる問題として分析する必要がある性質のものだからである。そうした否定研究の1つに極性項目の問題が挙げられる。

本稿では、否定の主要な研究テーマの1つである極性項目、さらにProgovac (1994) のセルビア・モンテネグロ語や、van der Wouden (1997) のオランダ語による研究から注目されるようになった両極項目 (bipolar element) について取り扱う。

吉村 (2000a, 2000b) は、日本語の両極項目の例として数詞「一」と分類詞に「でも」が付いた表現を挙げることができるとして、「一滴でも」や「一言でも」などを挙げている。本稿では、吉村が指摘する表現以外に両極項目があるのか、そして、NPIを両極項目にする際に現れる「で」の持つ機能について検証していきたい。

2. 極性項目

文や語句が肯定か否定かという性質のことを極性 (polarity) と呼ぶ。その極性が文や句の分布に左右されることがあり、このような極性の影響を受ける表現の事を極性項目 (polarity item) という。特に、肯定の影響を受ける表現を肯定極性項目 (Positive Polarity Item: PPI)、否定の影響を受ける表現を否定極性項目 (Negative Polarity Item: NPI) と呼んでいる。

2.1 肯定極性項目 (PPI)

PPIとは簡単に言えば、肯定文でよく使われる語句、表現のことである。PPIと呼ばれる語句にはsome, sometimes, several, already, still, too, also, would rather, had better, could just well, pretty, deliciousなど、様々な統語範疇にわたっており、これらの表現は否定環境とは共

*本論文は五十嵐 (2011) で述べた主要な論点を簡潔にまとめたものである。執筆にあたっては、主指導教員である橋本学先生、並びに副指導教員である齊藤伸治先生と松林城弘先生から多くの貴重なご意見を賜った。記して、ここに感謝の辞を述べさせていただきたい。

起することができない。

- (1) a. *Susan didn't eat some soup.
 b. *I would not rather go to Bali.
 c. *This cake isn't delicious.
 d. *Mary isn't pretty /selfish.

(1a) のような否定環境ではPPIである *some* は容認されない。(1b-d) においても、否定環境を作る *not* の作用域内でPPIである *would rather/delicious/pretty* は容認されない。ただし、メタ言語否定 (metalinguistic negation: MN) や二重否定においてはPPIが容認される場合がある。¹⁾

記述的定義としては、van der Wouden (1997) を採用する。彼はPPIを次のように定義した。

(2) Definition : PPI

Positive polarity items (PPIs) are expressions that cannot felicitously appear in negative contexts.

(1) の例文を見る限りでは、この定義は非常に的確であるように思われる。

2.2 否定極性項目 (NPI)

PPIとは対照的に、否定環境と共起するような語句、表現のことをNPIという。NPIもまた、様々な統語範疇にわたっており、統語的共通点が見当たらない。しかし、機能的な側面から見た場合、NPIは何らかの尺度における最小値を表したり、否定文脈を強調したりするものが多い。

NPIの例としては、以下のような例文が挙げられる。

- (3) a. I haven't ever met any popular musicians at the bar. (吉村 1999 : 3)
 b. Mary didn't budge an inch to help her boy friend. (奥野 2002 : 3)
 c. If she has ever been there, she can tell us about it

van der Wouden (1997) では、NPIを次のように定義している。

(4) Definition: NPI

Negative polarity items (NPIs) are expressions that can only appear felicitously in negative contexts.

(3a) や (3b) の例文は (4) の定義通りに思われる。しかし、(3c) のように、否定文脈を

1) a. There isn't anyone in this city who wouldn't rather be in New York. (二重否定) (村田 2005 : 117)
 b. A: So you trapped some mongeese.
 B: I didn't trap some monGEESE, I trapped some mongooses. (メタ言語否定) (Iwata 1998 : 57)

含まない例文もあり、定義通りではなく、NPIの振る舞いに関しては非常に複雑なのである。

2.3 NPI認可条件

NPIの複雑さというのは、前節で述べたとおりである。NPIを複雑にする要因として、NPI認可表現 (trigger, licenser) というものがある。そもそも、NPI自体は否定を表現することはできない。そのため、否定環境を作り出す役割のある認可表現と共起することにより、NPIとして成立するのである。

認可表現としては、(3a) と (3b) の *not* や、(3c) の *if* 節の他に、次のような例が挙げられる。

(5) before節 :

Billy the kid shot him before he *ever* got his hand on his gun.

(Higashimori 1986 : 107)

(6) 決定詞を伴う名詞句 :

At most 10 people have *any* interest in this.

(吉村 1999 : 10)

(7) 反意述語 :

He refused to *budge an inch*.

(8) 疑問文 :

Have you *ever* met John?

認可表現は否定環境を作り出すが、その否定環境が必ずしも全て同じ否定環境を作り出すわけではない。*not* は全てのNPIを認可するが、*not* 以外の環境では、容認されるNPIにばらつきがある。

(9) a. His paper is not *half bad*.

(吉村 1999 : 14)

b. She did not speak to *anyone*.

(10) a. *Among the amateur actors, no one was *half bad*.

b. No one talked about *any* of these facts.

(ibid.)

(9a) は、認可表現である *not* が NPI である *half bad* を容認するが、(10a) では認可表現である *no one* は *half bad* を認可することが出来ない。しかし、*no one* は *half bad* を認可できない一方で、*any* を認可することはできる。これらのことから認可表現には否定環境の強さの違いがあり、そうした要因が NPI の分布に影響を与えているようである。

3. 否定環境

NPI の分布を複雑にしているもう 1 つの要因として、NPI 自体に強さの違いがあるということが挙げられる。NPI の持つ強さというのは、明示的否定辞の *not* がある文脈にしか現れ

ないNPIが最も強く、容認される範囲が広がるほどに弱いNPIだと考えられる（吉村 1999: 18）。例えば、*any*のようなNPIはどのような否定環境にも現れることができる。一方、*a (single) bit*は*not*や*no one*と共起することができるが、*if*とは共起することができず、*half bad*は*not*とは共起するが*no one*とは共起しない。

(11) *any*

- a. John didn't speak to *anybody* there.
- b. No one talked about *any* of these facts. (吉村 1999 : 7)
- c. If you have *any* question, raise your hand.

(12) a (single) bit

- a. I am not a *bit* tired.
- b. Our walk was so short that no one got a *bit* tired.
- c. *She would call me if she were a *bit* worried about me. (吉村 1999 : 17-18)

(13) *half bad*

- a. His paper is not *half bad*.
- b. *Among the amateur actors, no one was *half bad*
- c. *What are you going to do about him if his work is half bad ? (ibid.)

これらのことから、NPIにも固有の強さがあるということがわかる。一般的には*any*のようにどのような否定環境にも現れるNPIを弱いNPIとし、*half bad*のように限られた否定環境でしか容認されないNPIは*any*よりも強いNPIであると考えられている。

van der Wouden (1997) は、オランダ語の分析をもとに、NPIが現れる否定環境を3段階に分け、弱い方からmonotone decreasing (MD), anti-additive (AA), antimorphic (AM) というブル特性を用いて定義した。また、PPIとNPIを否定環境の強さに応じて、3つに分類した。まずはこれらの考えがどのようなものなのかを確認していきたい。

3.1 MD特性

まずは、最も弱い否定文脈を含め、NPIが現れる全ての環境に成立すると考えられているmonotone decreasing (MD) 特性についてみていきたい。van der Wouden (1997) はMD特性を次のように定義した。

(14) Definition:

Let B and B^* be two Boolean algebras. A function f from B to B^* is *monotone decreasing* iff for arbitrary elements $X, Y \in B: X \subseteq Y \rightarrow f(Y) \subseteq f(X)$

(van der Wouden 199 : 95)

吉村 (2000) は「～ない」、「～を拒否する」、「もし～ならば」、「～はせいぜい n (数詞) だ」を日本語のMD特性を示す表現として挙げている。

- (15) a. 彼は野菜を食べない。→ 彼はほうれん草を食べない。

- b. 運動会で競技に参加した父兄はせいぜい10人だ →
運動会でかけっこに参加したのはせいぜい10人だ。 (吉村 2000 : 963)

3.2 AA特性

前節のMD特性にさらなる制約を加えることによって、中間の強さの否定文脈を与える anti-additive (AA) 特性となる。

(16) Definition:

Let B and B* be two Boolean algebras. A function f from B to B* is *anti-additive* iff for arbitrary elements $X, Y \in B$: $f(X \cup Y) = f(X) \cap f(Y)$

(van der Wouden 1997 : 99)

上で挙げた4つのMD特性を示す表現のうち、「～ない」、「～を拒否する」、「もし～ならば」はAA特性も示す。

- (17) a. 彼女は歌ったり踊ったりすることを拒否する。
彼女は歌うことを拒否するし、踊ることを拒否する。
- (18) b. もし英検か漢検で1級に合格すれば、お母さんは誉めてくれるだろう。
もし英検1級に合格すればお母さんは誉めてくれるだろうし、漢検1級に合格しても、お母さんは誉めてくれるだろう。

3.3 AM特性

AA特性に更なる制限を加えることによって antimorphic (AM) 特性になり、次のように定義される。

(19) Definition:

Let B and B* be two Boolean algebras. A function f from B to B* is *antimorphic* iff for arbitrary elements $X, Y \in B$: $f(X \cup Y) = f(X) \cap f(Y)$ and $f(X \cap Y) = f(X) \cup f(Y)$

上で挙げた3つのAA特性を示す表現のうち、「～ない」だけがAM特性も示す。

- (20) その犬は、吠えてかつ噛むことはなかった。
その犬は吠えなかったか、噛まなかった。 (吉村 2000 : 965)

以上のことから、「～ない」は強い否定文脈を与えるAM特性を、「～を拒否する」と「もし～ならば」は中間の強さであるAA特性を、「～はせいぜいnだ」は弱いMD特性を、それぞれ示すということがわかる。

van der Wouden (1997) は、MD文脈で容認されるNPIを弱いNPI、弱い否定文脈では容認されないが、中間の強さのAA文脈で容認されるNPIを中間の強さのNPI、中間の否定文脈では容認されないが、強いAM文脈で容認されるNPIを強いNPIというように、NPIを3つに分類した。

(21) Laws of polarity:

- a. Weak NPIs are expression that can felicitously occur in monotone decreasing contexts.
- b. NPIs of medium strength may be licensed by anti-additive contexts but not by downward monotonic ones.
- c. Strong NPIs may only be licensed by antimorphic contexts.

(van der Wouden 1997 : 130)

4. 両極項目

前節で挙げた分析から, van der Wouden (1997) は, オランダ語のPPIとNPIを3つに分類した。

(22) PPI:

- a. Strong: *allerminst* (not at all), *inderdaad* (indeed, actually), *niet* (not), *verre van* (far from)
- b. Medium: *een beetje* (a bit), *nogal* (rather), *maar* (but), *soms* (sometimes)
- c. Weak: *al* (already), *nog* (still), *ooit* (ever)

(23) NPI:

- a. Strong: *mals* (tender), *pluis* (plush), *voor de poes* (for the cat)
- b. Medium: *ook maar* (at all/any), *hand voor ogen* (see one's hand in front of one's face), *met een vinger* (touch with a finger)
- c. Weak: *kunnen uistaan* (can stand), *ooit* (ever), *hoeven* (need)

上のリストを見ると, *ooit* (ever) が weak PPI と weak NPI の2つに現れていることがわかる。van der Wouden は NPI と PPI 双方の性質を併せ持つ語彙項目のことを両極項目 (bipolar element) と呼ぶことを提案している。

PPI と NPI の両方の性質を兼ね備えている両極項目 (bipolar element) は比較的最近注目されるようになってきた。Progovac (1994) でセルビア・クロアチア語の研究が発端となり, Van der Wouden (1997) がオランダ語の分析から, PPI と NPI の両方の性質を持っている語句を両極項目 (bipolar element) と名付け, 日本語においては吉村 (1999, 2000a, b) が両極表現があるということを主張している。

吉村 (1999, 2000) は, 日本語の両極項目として, 数詞「一」と分類詞に「でも」が付いた表現を挙げている。例えば, *Minimizer*²⁾ の「一滴も」に「で」を加えた形である「一滴でも」という表現が両極項目であり, 「一度でも」や「一言でも」, 「一本でも」のような表現も

2) Horn (2001) は最少の量を表すNPIを *Minimizeer* と呼んでいる。

Minimizer とは, 否定を強めるために否定のスコープ内に現れ, 最小量すらないということを示す働きをする要素である。

同様の振る舞いを示すと吉村（2000）は述べている。

- (24) a. 花子はアルコールを{|一滴も/*一滴でも|飲まなかった。(AM)
 b. 花子はアルコールを{|?一滴も/一滴でも|飲むことを拒否した。(AA)
 c. もし花子がアルコールを{|*一滴も/一滴でも|飲めば, 忘年会も楽しくなるだろう。
 (AA)
 d. 女性の中でアルコールを{|*一滴も/一滴でも|飲んだのは, せいぜい5人だった。
 (MD)
 e. 花子はアルコールを{|*一滴も/*一滴でも|飲んだ。(MI)³⁾ (吉村 2000:968)

「一滴でも」という表現は (24e) のように肯定文であるMI環境では容認されない。また, (24a) のような最も強い否定環境であるAA環境でも容認されない。しかし (24b) や (24c) のようなAA環境と (24d) のようなMD環境では容認される。

これらのことから, 「一滴でも」という両極項目はNPIとPPIの両方の性質を持ち合わせており, 弱いNPIの性質を持つためにMIでは容認されないが, MDとAAの2つの環境では容認されること, また, 弱いPPIとしての一面もあるためにAM環境では容認されないということを示している。

ここまでの議論を踏まえると, Minimizerと言われる表現だけが両極項目になれるように思える。しかし, 日本語の両極項目になれる要素は本当にMinimizerだけなのだろうか。興味深いのは, 吉村 (1999) は「一言も」を強いNPIに分類しているが, 「一言でも」とすると両極項目になると述べていることである。両極項目は弱いNPIとPPIの両方の特性を持っているということなので, 「で」はMinimizerとしての機能を弱める働きがあるように思われる。では, どうして「で」にNPIを弱めるような機能があるのだろうか。この問題に対する解を提示する前に, まず, 他のNPIで考察してみよう。

本稿では「少しも」というNPIに「で」を加えた「少しでも」という表現も両極項目になるのではないかと考える。

まずは, 「少しも」がNPIであることを確認していきたい。「少しも」はNPIの1つであるために, (25a) や (26a) ように否定文では用いることができるが, (25b) や (26b) のような肯定文では用いることができない。

- (25) a. その小説は少しも面白くなかった。
 b. *その小説は少しも面白い。
- (26) a. 部屋が少しも綺麗にならない。
 b. *部屋が少しも綺麗になる

3) MIとはmonotone increasingの略であり, 次のように定義される。

Definition: Monotone increasing

Let B and B* be two Boolean algebras. A function f from B to B* is *motone increasing* iff for arbitrary elements $X, Y \in B: X \subseteq Y \rightarrow f(X) \subseteq f(Y)$.

これらのことから「少しも」はNPIであることがわかる。また、吉村(2000)が挙げている「～ない」「～を拒否する」「もし～ならば」「～はせいぜい n (数詞)だ」のような否定環境と肯定環境の中に「少しも」を入れて作例してみると次のような結果になる。

- (27) a. 花子はアルコールを少しも飲まなかった。(AM)
 b. *花子はアルコールを少しも飲むことを拒否した。(AA)
 c. *もし花子がアルコールを少しも飲めば、忘年会も楽しくなるだろう。(AA)
 d. *女性の中でアルコールを少しも飲んだのは、せいぜい5人だ。(MD)
 e. *花子はアルコールを少しも飲んだ。(MI)

「少しも」はAM環境では容認されるが、それ以外の環境では容認されない。また、AM環境でのみ容認されているため、「少しも」は強いNPIであるように思われる。しかし、「少しも」に「で」をつけて「少しでも」にすると結果が違ってくる。

- (28) a. *花子はアルコールを少しでも飲まなかった。(AM)
 b. 花子はアルコールを少しでも飲むことを拒否した。(AA)
 c. もし花子がアルコールを少しでも飲めば、忘年会も楽しくなるだろう。(AA)
 d. 女性の中でアルコールを少しでも飲んだのは、せいぜい5人だ。(MD)
 e. *花子はアルコールを少しでも飲んだ。(MI)

「少しも」というNPIに「で」を加え「少しでも」にすると、(24)の「一滴でも」と同様に、AM環境とMI環境以外で容認されるようになる。つまり、「少しでも」も両極表現であると考えることができる。

次に、「少しでも」を両極項目と考えるならば、両極項目となる表現にはどのような共通性があるのだろうか。

- (29) a. 伊藤和夫の本を1ページでも読めば、大学入試に役立つだろう。
 b. 伊藤和夫の本を少しでも読めば、大学入試に役立つだろう。

(29a)は、吉村が両極項目であるとする形式であり、(29b)は「1ページでも」を「少しでも」に変えた文である。(29a)は本の最小値である1ページを読みさえすれば役立つだろうということになるが、(29b)は、最低でも2、3ページを読みさえすれば役立つだろうということを示しており、(29b)が含意するページ数の中に、最小値である1ページが含意されている。これらのことから、少なくとも日本語の両極項目は次のことが言える。

- (30) 日本語の両極項目は、minimizerと呼ばれている最小値を表す語句・表現、もしくは、最小値を含意する語句・表現である。

ここまでの分析をまとめると、強いNPIである「一滴も/少しも」に「で」を加えた「一滴でも/少しでも」は両極項目であり、弱いNPIとPPIの両方の特性を持っているということになる。

前述したように、「一滴も」や「一言も」、「少しも」などは、それら自体が強いNPIである。

ということは、強いNPIに「で」が付加されることによりNPIとしての程度が弱められていることを意味している。

- (31) a. *もし太郎がその小説を一度も読めば、もっと続きが読みたくなるだろう。
 b. もし太郎がその小説を一度でも読めば、もっと続きが読みたくなるだろう。

強いNPIである「一度も」は(31a)では容認されないが、「で」が入ることによって同じ文脈である(31b)では容認される。なぜ「で」が入ることによって、NPIとしての程度が弱くなるのだろうか。

- (32) a. こんな子供もできるよ。
 b. こんな子供でもできるよ。
- (33) a. いくつも食べられるよ。
 b. いくつでも食べられるよ。

(32a, b)も(33a, b)も「で」が付くか付かないかの違いしかないが、意味的には差があるように思われる。それは(32a)よりも(32b)の方が極端であり、また「本当に子供でもできる簡単なことなのに」というようことが強調される。また、同様に(33a)よりも(33b)の方がたくさん食べられることが強調されているように思われる。これらのことから、「で」には肯定を強調するような機能があると仮定することができるのではないだろうか。このように仮定すると、「で」が強いNPIと共起することによって元々強いNPIが弱くなることを上手く説明できる。元々肯定を強調する機能を持つ「で」が強いNPIの中に埋め込まれることにより、NPIの強さが弱められ、「で」が持つ強さも弱められる。そのために強いNPIは弱いNPIと弱いPPIの両方の特性を持つようになるものと考えられるのである。

5. 結論

私たちはある種の表現は肯定文で用いことを知っているし、また別の表現は否定文で用いることを知っている。前者で用いられるような語句のことを肯定極性項目(PPI)と呼び、後者で用いられるような語句のことを否定極性項目(NPI)と呼ぶ。逆の見方をすれば、PPIが否定文で、NPIが肯定文で用いられることはない。しかし、第4節で紹介したように、Van der Wouden (1997)の分析によれば、オランダ語にはPPIとNPIの両方に現れる語句が存在し、そういった語句は両極項目と呼べる性質を持っている。日本語においても、吉村(2000)が「一」+「分類詞」+「でも」という表現が両極項目であることを指摘している。本稿では、日本語の他の例として、最小値を含意する表現である「少しでも」も同じ性質を持っていることから、両極項目の1つであるという分析を提案した。

さらに、両極項目は弱いPPIと弱いNPIの両方の特徴を持つと考えられているが、どうして「で」が入ることによりNPIが弱まるかという問題に対して、肯定文の例を用いながら「で」には肯定を強調する役割があり、そのためにNPIに埋め込まれることにより、NPIとしてもPPIとしても弱くなるのではないかという仮説を提案した。

最後に今後の研究課題について述べておく。一般的にはPPIとNPIはどの言語にもあるというように考えられている。しかし、両極項目に関してはProgovac (1994) のセルビア・クロアチア語, van der Wouden (1997) のオランダ語, 吉村 (2000) の日本語などでは確認されているが, 吉村 (2000) によれば英語では見当たらないと述べている。PPIとNPIは普遍的な現象であるにも関わらず, 両極項目は本当に英語にはないのだろうか。普遍的な現象でなければ, それぞれの言語によってどのような制約があるのだろうか。これはこれからの研究課題になるだろう。

本論文の分析からも明らかなように, 極性項目の共起問題は, PPIとNPIの問題だけでも複雑に入り組んでいるが, そこに両極項目の問題も加えて考察するとますます複雑なものとなる。しかし, PPIとNPIだけではなく, それら2つの特質を有するような両極項目を更に分析していくことにより, 極性項目現象の本質や全体像を解明することに繋がっていくものと考えられる。

参考文献

- 五十嵐祐太 (2011) *On the Licensing Condition of Polarity Items*, MA Thesis, Iwate University.
- 今仁生美 (2010) 「否定と意味論」, 『否定と言語理論』, 加藤泰彦, 他 (編), 開拓社, 東京.
- 奥野忠徳・小川芳樹著 『極性と作用域』, 研究社 (英語学モノグラフシリーズ 9), 東京.
- Allwood, J. et al. 著 公平珠躬・野家啓一訳 (1996) 『日常言語の論理学』, 産業図書, 東京.
- 河西良治 (2000) 「*少ししか食べるわけではない」, 『言語』 第29号第11号.
- 加藤泰彦 (2005) 「ホーン 『否定の博物誌』 覚え書 (1) —説明の探求—」, 『上智大学外国語学部紀要』 40.
- 久野暲・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味』, 開拓社, 東京.
- Klima, Edward S. (1964) "Negation in English," *The Structure of Language*, ed. By Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, PrenticeHall, Englewood cliffs, NJ.
- 中島平三編 (2001) 『[最新] 英語構文事典』, 大修館, 東京.
- 東森勲・吉村あき子著 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』 (英語学モノグラフシリーズ 21), 研究社, 東京.
- 廣瀬幸生・加賀信弘著 (1997) 『指示と照応と否定』 (日英語比較選書 4), 研究社, 東京.
- van der Wouden (1997) *Negative Contexts: Collocation, Polarity, and Multiple Negation*, Routledge, London and New York.
- D.ボリンジャー著 中右実訳 (1981) 『意味と形』, こびあん書房, 東京.
- Horn Laurence (2001) *A NATURAL HISTORY OF NEGATION* (2nded), CSLI publications, Stanford.
- (2002) "Assertoric Inertia and NPI Licensing", *CLS* 38, Part 2.
- Progovac, Ljiljana (1994) *Negative and Positive Polarity*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 山田小枝 (1997) 『否定対極表現』, 多賀出版, 東京.
- 吉村あき子 (1999) 『否定極性現象』, 英宝社, 東京.
- (2000a) 「日本語の否定環境」, 『藤井春彦先生退官記念論文集』, 英宝社, 東京.
- (2000b) 「*一滴でも飲まなかった/*飲んだ」, 『言語』 第29号第11号.
- (2008) 「否定の語用論研究をめぐる境界問題」, 『奈良女子大学文学部研究教育年報』 第5号.
- (2010) 「否定と語用論」, 『否定と言語理論』 加藤泰彦, 他 (編), 開拓社, 東京.
- Ladusaw, William A. (1979) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*, Doctoral dissertation, University of Texas.
- (1980) "On the Notion Affective in the Analysis of Negative-Polarity Items," *Journal of Linguistic Research* 1.
- (1997) "Negation and Polarity," *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, Blackwell.
- WATANABE AKIRA (2004) "The Genesis of Negative Concord: Syntax and Morphology of Negative Doubling," *Linguistic Inquiry*, Volume 35, Number 4.
- (2010) 「両極性表現」, 『否定と言語理論』 加藤泰彦, 他 (編), 開拓社, 東京.

